

要録の有効な活用に関する提言

～ 保育所保育要録と幼稚園指導要録の記述における 5 歳児の見とりの比較を通して～

井 口 眞 美

(2010年10月20日受理)

要 約

平成21年度改正の「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」「小学校学習指導要領」には保幼小連携の必要性が共通して明記され、保育所においても園児の進学する小学校へ保育所保育要録を送付することが義務付けられた。

本稿では、就学前の子どもの記録である「保育所保育要録」と「幼稚園指導要録」の実際の記載内容にどのような相違点があるかを明らかにした。また1年担任へのインタビュー調査を行い、要録がより有効に活用されるために必要な情報についても提言している。結果として、保育所保育要録においては、『スコープ』の視点から教育の5領域ごとの見とりが“横断的に記述”される傾向が見られた。一方、幼稚園指導要録においては、『シーケンス』の視点から5歳児1年間の育ちの経緯が“縦断的に記述”されていた。また1年担任が求める要録の情報と記載されている内容とは隔たりがあり、十分に活用されていないという課題も浮き彫りになった。

キーワード 保幼小連携、保育所保育要録と幼稚園指導要録、スコープとシーケンス、横断的記述と縦断的記述

I. 問題と目的

1. 本研究に関する動向

平成21年度改正された「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」「小学校学習指導要領」では、保幼小が連携を図り相互理解や情報交換をし、それぞれの保育・教育方法を改善することの重要性が挙げられている。具体的には、保育所では、園児の進学する小学校へ保育所児童保育要録を送付することが新たに義務付けられた。『保育所や幼稚園等と小学校における連携事例集』においても、「保育要録、指導要録の活用（認定こども園から送付される認定こども園こども要録を含む）等を通じて、小学校における個に応じたきめ細やかな指導の継続性を図っていく必要がある」¹⁾と記されている。

これにより小学校では、就学前の子どもたちの情報を幼稚園のみならず保育所からも得られることになった。言い換えれば、1年担任は、1年生全員の情報を収集した上で入門期の指導が進められるのである。また、適切な就学前の情報を得ることは入学時期の指導に役立つだけでなく、保育所や幼稚園の保育・教育を理解する有効な手だてともなる。もちろんこれまでも、小学校で気になる子どもについて保育所や幼稚園から情報を得ようとする動きはあった。しかし、一部の気になる子に留まらず全員の子どもの情報が提供されることで、幼児期の教育にとって最も大切にされるべき「一人ひとりの子どもの実態を把握して保育・教育を行う」という保育理念の理解が深まると思われる。

ところが現実には、保育所では、保育要録作成に関して園内外の研修を積み園児の記録の充実を心がけてはいるものの、どのように記述したらよいのか戸惑う声も耳にする。また、既に指導要録の送付が義務付けられている幼稚園においても、実際に要録を送付しているのは、国公立園の80%、私立園の56%に留まっている。²⁾

保育所でも幼稚園でも「1年担任が要録をどのように理解し活用しているのか」「要録が子ども理解を図るために有効な手段となっているのか」を知らないまま要録を作成することが多い。要録の有効性が保育所・幼稚園に周知されていないために、要録を送付する必要感も高まらないのだと思う。また、複数の保育所や幼稚園から子どもを迎える小学校において、全員の情報が欠けていることも要録が十分に活用されない理由の一つであろう。

2. 本研究で明らかにしたいこと

まず、保育所保育要録と幼稚園指導要録が、「保育所保育指針」「学校教育法施行規則」等においてどのように定められているのかを見てみる。（表1 参照）

それぞれ表現の仕方は異なるが、どちらも、子どもの成長の姿が記録された公簿であると共に、小学校との連携を図るための資料であるとも言える。

表1 保育所児童保育要録と幼稚園幼児指導要録に関する規定（抜粋）^{3～6)}

	保育所児童保育要録	幼稚園幼児指導要録
要録に関する表記	・「子どもの育ちを支えるための資料」 ・市町村の支援の下に、小学校へ送付される (保育所保育指針)	「幼児指導の資料」とするとともに、 外部に対しての証明のための原簿となる (学校教育法施行規則)
記載事項	入所に関する記録・保育に関する記録	学籍の記録・指導の記録
作成時期と 小学校への送付	最終年度に作成する。 小学校へは、保育要録の写しを送付する。	各学年ごとに作成する。 小学校へは、指導要録の写し、または 最終年度の抄本を送付する。

（各省庁が示した「様式の参考例」については、表2、表3を参照）

これまで長い間、保育所と幼稚園では、保育内容等に関して十分に情報交換をし共通理解を図ってきたとは言えない。そのため、「養護」的な要素を強く保ってきた保育所と、「教育」の視点を重視してきた幼稚園とでは、要録の記載内容にも違いが見られるのではないかと考えた。保育所保育要録の書き方を例示する研究や著書^{7～10)}は多数見られるが、本年度（制度上）初めて送付される保育所保育要録の実例に基づく先行研究はまだ存在しない。

本研究においては、保育所保育要録と幼稚園指導要録の記載内容を比較・分析し、5歳児の見とりの相違点を明らかにすることを目的とする。また、保育所保育要録と幼稚園指導要録を受け取った1年担任へのインタビュー調査の結果等を加味して、要録の有効な活用に関しても提言を試みたい。

Ⅱ．方法

1．調査対象

A小学校平成22年度入学者 2クラス80名（要録の分析及び授業観察）
及びその担任 2名（インタビュー調査）

2．調査時期と方法

（1）平成22年4月初旬～5月初旬

①A小学校平成22年度入学者の保育所保育要録・幼稚園指導要録（または抄本）
80名分の調査及び分析

…出身保育所・幼稚園からの要録（または抄本）における5歳児の記述を比較・分析し、相違点を抽出する。

②A小学校平成22年度入学者の授業場面における行動観察（週2回）

（2）平成22年5月初旬

①1年担任2名へのインタビュー調査

…要録の活用状況、1年担任が必要とする情報等に関するインタビューを行う。

Ⅲ．結果と分析

1．保育所保育要録・幼稚園指導要録の送付状況について

- ・A小学校に送付された要録は、80名分中65名であり、15名分が未送付であった。（80名中33名はA小学校附属幼稚園出身）
- ・要録が送付された65名のうちわけは以下の通りである。
 - 保育所7名（7園）
 - 附属幼稚園33名（1園：要録写し）
 - 他幼稚園25名（22園：12園が要録写し、10園が抄本）

2. 保育所保育要録と幼稚園指導要録の「様式の見本例」

（1）保育所保育要録

最終年度に『入所に関する記録』と『保育に関する記録』を作成する。

表2 保育所保育要録 様式の見本例

ふりがな		性別	就 学 先		
氏 名			生年月日		
保育署名 及び所在地	(保育所名)	(所在地) 〒 —			
保育期間	平成 年 月 日～平成 年 月 日 (年 か月)				
子どもの育ちに関わる事項					
【保 1】					
養護（生命の保持及び情緒の安定）に関わる事項			（子どもの健康状態等）		
【保 2】			【保 3】		
項 目	教育（発達援助）に関わる事項				
健康	・明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。 ・自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。 ・健康・安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける。			【保 4】	
人間関係	・生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。 ・身近な人と親しみ、関わりを深め、愛情や信頼感を持つ。 ・社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。				
環境	・身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心を持つ。 ・身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。 ・身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。 ・自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。				
言葉	・人の言葉や話をよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。				
表現	・日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、保育者や友達と心を通わせる。				
現	・いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性を持つ。 ・感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。 ・生活の中でイメージを豊かにし、さまざまな表現を楽しむ。				
施設長名	印	担当保育士名	印		

「子どもの育ちに関わる事項」（【保1】の欄）

保育所生活全体を通して、子どもの育ってきた過程を踏まえ、その全体像を通して総合的に記載。

「養護に関わる事項」（【保2】【保3】の欄）

生命の保持や情緒の安定に関する事項について記載。

「教育に関わる事項」（【保4】の欄）

子どもの保育を振り返り、保育士の発達援助の視点等を踏まえた上で、主に最終年度（5、6歳）における子どもの心情・意欲・態度等について記載。¹¹⁾

- （2）幼稚園指導要録（ここでは『指導の記録』のみ掲載）
各学年ごとに、『学籍の記録』と『指導の記録』を作成する。

表3 幼稚園指導要録 様式の見本例

ふりがな		平成 年度
氏 名	----- 平成 年 月 日生	指導の (学年の重点)
性 別		重点 (個人の重点)
ねらい（発達を捉える視点）		【幼1】
健康	明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。 健康・安全な生活に必要な習慣や態度を身につける。	
人間関係	幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。 身近な人と親しみ、関わりを深め、愛情や信頼感を持つ。 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。	
環境	身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心を持つ。 身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や量、文字などに対する感覚を豊かにする。	
言葉	自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。 人の言葉や話等をよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、保育者や友達と心を通わせる。	
表現	いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性を持つ。 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。	
出席欠	教育日数 出席日数	備考 【幼2】

『指導の記録』

1年間の指導の過程とその結果を要約し、次の年度の適切な指導に資する。

「個人の重点」1年をふり返って重視したことを記入。

「指導上参考となる事項」（【幼1】の欄）

各領域のねらいを視点として、当該幼児の発達の実情から向上が著しいと思われるもの。幼稚園生活を通して全体的、総合的に捉えた幼児の発達の姿。

「備考」（【幼2】の欄）

教育時間の終了後の教育活動を通した幼児の発達の姿も記入可能。¹²⁾

3. 記載内容について

次に、保育所保育要録の『保育に関する記録』と、幼稚園指導要録の『指導の記録』の記載内容の結果と分析について述べる。（○印で結果、・印で分析内容を示した。）

（1）保育所保育要録『保育に関する記録』の記載内容

①「子どもの育ちに関わる事項」（表2【保1】参照）

○この欄は、7事例中6事例で設定されている。（1事例はなし）

その6事例のうち4事例では文頭に「1歳児で入園」等入園時期が記入してある。続けて「活発で好奇心が旺盛である」等、現在の一般的な状況が書かれているもの（2事例）と、「乳児クラスでは」等、入所からの発達の経過を簡潔に記しているもの（2事例）とに分かれた。

- ・この欄は、入所してから現在までの発達過程を総合的に記載することになっている。しかし、数年に亘る長いスパンでの見とりが書きにくかったり、担任が入所時の様子を知らなかったりするため、記載内容が統一されにくいのだと思う。そこで、5歳児1年間の状況に限定してもよいのではないかと考えた。また、「出欠の状況」や「延長保育や土曜保育を行っていた」等の情報も加えると、保護者の状況を把握しやすい。

○2事例は、子どもの育ちではなく、1年担任に伝えたい特記事項を記載していた。身体面で伝えたいことがある子どもに関しての情報（1事例）、次子の出産により子どもが不安定になったという情報（1事例）が記されている。

- ・この2事例の内容は、②「養護に関わる事項」に記載されるべきであろう。

②「養護（生命の保持及び情緒の安定）に関わる事項」（表2【保2】参照）

○ここには、アレルギーに関すること（1事例）、食事の様子や身辺自立の状況、情緒の安定性（3事例）の記載があった。残り3事例は「特になし」。

③「養護（子どもの健康状態等）に関わる事項」（表2【保3】参照）

○ここは、健康状態で特記事項がある場合のみ記載される欄であるため、7事例中5事例が「特になし」であった。

- ・1年担任が予め把握しておくべき、アレルギー等の健康状態についての情報を書く欄が設けられているのはわかりやすい。

④「教育（発達援助）に関わる事項」（表2【保4】参照）

○保育要録では7例全てで『5つの領域（健康、人間関係、環境、言葉、表現）』に対応させて記述している。それぞれの領域ごとに、その子が好んで取り組んだ具体的な遊び名や取り組みの様子等が書かれている。（例：運動遊びを好み、縄跳び、ボール遊び等にも興味が出て、一生懸命に頑張る姿が見られる。）

○中でも2例では、領域ごとに罫線を引いて5つに区切り、それぞれの領域に関する事項を記載していた。

- ・記述の内容は、幼稚園と同様、その子が好んだ遊びを通して、「関心・意欲・態度」の観点からどのように取り組んだかが具体的に記述されている。

幼稚園指導要録に比べ、子どもの育ちを総合的に見とった記述が見えにくい。5つの領域ごとに区切った記述では「保育の内容は、生活や遊びを中心として相互に関連を持ちながら総合的に展開される」という保育所保育指針の主旨が伝わりにくいのではないか。その反面、5領域（健康、人間関係、環境、言葉、表現）ごとに表記してあるため、小学校の教科領域（国語、算数…）の視点に慣れている1年担任から見ると、この記述は読み取りやすいのかもしれない。

○1例のみ「発達の状況」の欄（「表4 幼稚園指導要録旧様式（一部）」を参照）が設けてあり、5領域15項目の全てについて○印がついていた。

- ・15項目のいずれにおいても、1年間で著しい発達が見られたという意味であろう。しかし、（これまでの幼稚園指導要録の一般的な書き方から見ると）その子がどの項目で特に著しい発達の変化が見られたのかが見えにくい。

（2）幼稚園指導要録『指導の記録』の記載内容

幼稚園指導要録（あるいは抄本）のうち、附属幼稚園33名の要録は1名の幼稚園担任が記述しているため記述のパターンに一貫性が見られた。そこで、この33事例の中から1事例を無作為抽出することにした。そのため、以下は、附属幼稚園1事例、他幼稚園25事例、計26事例のデータの分析結果である。

①「指導上参考となる事項」（表3【幼1】参照）

○26事例中19事例で「進級当初は…」「前期には…」「1学期には…」等、年度当初から時間の経過に従って述べられている。そのため、「以前は～であったが最近では」「～するようになってきた」等の表記が多く見られる。

- ・ここでは、『5歳児1年間の育ちの経緯』を視点として記述されている。否定的な記述はなく（0事例）、肯定的な記述表現が用いられ、その子のどこが成長したかに記述の重点が置かれている。

○内容としては、26事例とも、具体的な遊びの名称（26事例）や行事等の場面（16事例）を挙げ、遊びへの取り組み方（疑問をもったことは納得がいくまでやろうとする／こだわりが強い等）に加え、友達関係（友達を誘って／その中で友達関係も広がっていった等）についても関連付けて述べている。

- ・『遊びへの取り組み方』と『友達関係』の2つのカテゴリーに分類される上、『遊びへの取り組み方』は「関心・意欲・態度」の観点から記述されていた。

○年度当初から時間の経過に従って述べている事例が多く（19事例）、学期あるいは期ごとに段落にし、最後の段落で、「集まった場面での話の聞き方」「生活面での育ち」について追記している事例も多かった。（14事例）

- ・『遊びへの取り組み方』『友達関係』に加え、『生活面』が3つ目のカテゴリとして挙げられる。最後の段落の「集まった場面での話の聞き方」「生活面での育ち」は、1年担任に伝えたい内容を強調するため追記したと思われる。
- ・26事例全てで、書面の左側に「ねらい（発達を捉える視点）」が印字されているが、その視点ごとではなく、『遊びへの取り組み方』『人間関係』『生活面』の3つのカテゴリに分類される総合的な育ちが記載されていることがわかった。

○「(遊び出せない様子が見られたので) 教師は、本児の遊びの興味を探り、援助をしていった」「見守った」等、教師がどのように関わったかを具体的に記載していたのは5事例のみであった。

- ・この5事例では、子どもがトラブルに直面した時に教師がどのように関わったかを具体的場面を挙げて記載していた。しかし、他の21事例に記載されていないことから、幼稚園指導要録の限られたスペースにおいて、教師の関わり方についてまで記述するのは困難なのかもしれない。

○6事例で旧様式の要録を使用していた。「ねらい（発達を捉える視点）」の5領域15項目のうち、発達が著しいと思われる項目について「発達の状況（表4参照：新様式にはこの欄がない）」に○印をつけている。なお6事例とも、それ以外の表記内容に、他の事例との相違はなかった。

- ・旧様式では、15項目中、発達が著しかった内容に○印がついているため1年担任にとっては、ひと目でわかりやすい。ただし、この○印はどの項目が優れていてどの項目が劣っているかという項目間、ないしはクラス内の相対的達成度の指標ではなく、どの項目が1年間で著しく発達したかという個人内の絶対的な指標である。その点を1年担任に正しく理解してもらう必要がある。

表4 幼稚園指導要録旧様式（一部）

ねらい（発達を捉える視点）		発達の状況
健康	明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。	○
	自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。	
人間関係	健康・安全な生活に必要な習慣や態度を身につける。	○
	幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。	
	身近な人と親しみ、関わりを深め、愛情や信頼感を持つ。	

②「備考」（表3【幼2】参照）

○この欄には「教育時間の終了後の活動についても記入できる」ことになっているが、実際には、26事例全てにおいて「欠席理由」のみが記載されていた。

4. 1年担任へのインタビュー調査の結果

5月初旬、1年担任2名に対し「今回送付された要録をどのように活用したか」「1年担任が必要とする就学前の子どもに関する情報とは何か」についてインタビュー調査を行った。今回の研究では、1年担任の実態を把握するため、「要録を活用して入門期の指導を進めてほしい」といった積極的な研究依頼は全く行っていない。その結果として、

○気になる子がいたので、その際要録を見てみた。しかし「具体的なトラブル場面での教師の関わり」が書かれておらず、あまり役に立たなかった。また、1年担任にとって必要な「保護者についての情報」が書かれていない。

○見ていない。内部進学者については幼稚園担任との連絡会で報告を受けているし、できるだけ先入観をもたずに自分の目で子どもを見たい。

との回答を得た。

1年担任にとって、要録の情報はあまり有用な情報であるとは言えず、十分に活用されていない状態であることがわかった。また、1年担任は、要録から『具体的なトラブル場面での保育者の関わり』『保護者について』の情報を得たいと考えている。

今後の課題として、保幼小それぞれの立場で要録の内容や活用方法について意見を出し合い、要録の改善を図る必要がある。

4月から5月初旬まで週2回の授業観察も補足的に行ったが、上述の1年担任のインタビューを裏付ける結果が得られた。（個人情報保護の観点から、ここでは詳細なデータは省略するが）一例として、観察期間中に、1年担任が、指導上気になる子として関わっていたA子の保育要録には、1年担任が必要としたトラブル場面の情報はなかった。

1年担任は、指導に迷った時に、特定の子の要録を見直している。公簿としての要録に『トラブル場面での保育者の関わり』や『保護者について』の情報をどこまで載せられるかは今後の課題であろう。

IV. 考察

1. 『スコープ』と『シーケンス』の視点に基づく“横断的記述”と“縦断的記述”

本研究において、保育所保育要録と幼稚園指導要録とでは、明らかな記述の視点の相違が見られた。その相違点をカリキュラム構成論における2つの視点に基づき考察してみたい。

カリキュラム構成論において、『スコープ』とはカリキュラム的内容的な領域を示す視点であり、『シーケンス』とはその内容の連続的な系統性を示す視点である。一般的に、この『スコープ』を横軸に、『シーケンス』を縦軸としてカリキュラムは構成され表記される。¹³⁾ (図1参照)

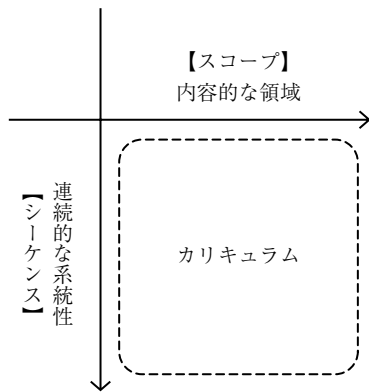


図1 カリキュラム構成論上の2つの視点

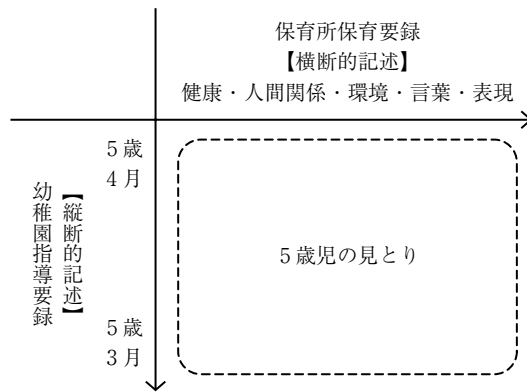


図2 要録の記述の視点

（1）保育所保育要録における5歳児の見とりの特徴

保育所保育要録では、様式の見本例にある「発達援助の視点等を踏まえた上で」との表記に従い、5歳児終期の姿を5領域ごとに区切って記述している。その分、1年間でどのように変容、成長したかという育ちの経緯の記述が少ない。

これは、カリキュラム構成論でいう『スコープ（＝内容的な領域）』の視点から子どもを見とり（評価し）、5歳児終期における「教育の5領域ごとの見とり」を記述したと言える。この記述の特徴を、特定の時点における記述という意味で“横断的記述”と呼びたい。（図2参照）

（2）幼稚園指導要録における5歳児の見とりの特徴

幼稚園指導要録では、様式の見本例にある「1年間の指導の過程とその結果を要約する」との表記に従い、5歳児4月から3月までの1年間の育ちの経緯が総合的に示されている。その一方で、様式の見本例には「各領域のねらいを視点として」と示されているものの、実際には、5領域ごとの育ちの姿は見えにくかった。

幼稚園指導要録では、『シーケンス（＝連続的な系統性）』の視点から子どもを見とり（評価し）、5歳児4月から3月までの「1年間にわたる育ちの経緯の見とり」を記述する傾向が強い。この記述の特徴を、時間的な経緯を追った記述という意味で“縦断的記述”と呼ぶ。（図2参照）

2. 保育所保育要録と幼稚園指導要録の記述の改善に向けて

今回の全ての保育所保育要録、幼稚園指導要録で、「その子が何の遊びにどのように取り組んだのか」といった「関心・意欲・態度」の観点からの記述がされている。このことは、1年担任にとって、就学前の子どもたちが何を経験し、何を大切に保育されてきたかを知る有効な手がかりとなるだろう。

次に、それぞれの要録の改善点について考えてみたい。

（１）保育所保育要録に関して

保育所にとって、今回の要録作成は初めての取り組みである。今後の改善に向け、「１年間の育ちの経緯を縦断的に見とる」視点からも記述することが重要だと考える。

本来、保育所保育要録では、「子どもの育ちに関わる事項（表２【保１】）」で、「子どもの育ってきた過程を踏まえ、その全体像を通して総合的に記載」することになっている。しかし、現実には、スペースが狭いこともあるのか、十分な情報が得られなかった。この欄に、子どもの育ちの経緯を詳しく記述することでも改善が図られると思う。また、「養護に関わる事項（生命の保持及び情緒の安定）（表２【保２】）」の欄も、問題がない限り、「特になし」と表記する傾向が見られた。

保育所保育要録においては、それぞれの欄に、子どもの見とりをより詳細に記載していくことが求められるだろう。

（２）幼稚園指導要録に関して

幼稚園では、本年度より要録の様式が改正され、５領域１５項目の「発達の状況（表４）」の評価欄がなくなった。そのため、これまで以上に「各領域のねらいを視点として」記述する必要性が生じた。それでない、１年担任から見ると、記述が総括的過ぎて活用しにくいものに陥る危険性がある。幼稚園指導要録では、「５領域の視点から子どもを横断的に見とる」分析的な視点が求められると思う。

また、幼稚園指導要録の中には、（多くの事例で記載されているにも関わらず）食事の様子、身辺自立の状況、情緒の安定性等「生活面」に関する欄がない。その点で、保育所保育要録の「養護に関わる事項」があるのは読みやすい。「生活面」に関しては、詳細に書くだけでなく、独立させて読みやすくするとよいだろう。

V. まとめ

１．要録がより有効に活用されるための提言

１年担任は、子ども一人ひとりがどのような育ちを経て小学校に入学してきたのかを把握した上で、入門期の指導を計画する必要があると思う。そのためにも、子どもの育ちや指導の記録である要録が果たす役割は大きい。しかし、１年担任にとって、要録が十分に価値のある資料となっていないという重大な現実も浮き彫りになった。ここでは、今後研究を重ねる上で考えていきたい要録の有効な活用に関して提言する。

11

（１）保育所保育要録と幼稚園指導要録の記述の視点を共有していく

考察で述べたように、「５領域ごとに“横断的に”記述している保育所」と「１年間の育ちの経緯を“縦断的に”記述している幼稚園」とでは、５歳児の見とりの視点が異なるため、１年担任から見ると内容が読み取りにくい。書式が異なるのはやむを得ないにしても、保育所と幼稚園が表記の視点を共有し、共に改善を図る必要がある。

（2）それぞれの保育所・幼稚園の保育の情報を提供する

「絵画・製作にじっくり取り組める」「預かり保育登録児（1事例）」等の表記が見られたが、その保育所・幼稚園生活の全体像が見えずに、個人の記録だけが送付されても子どもの育ちはわかりにくい。

要録送付にあたり、保育所や幼稚園の「要覧」や「案内」等、一日の生活の流れを表記した書類を添付するとよいと思う。遊びの場面が多い園、一斉保育が中心の園等、保育形態が異なったり保育時間にも差があったりする。それぞれの個人の記述がどのような園生活の中で見とれたものなのかを1年担任に理解してもらう必要がある。

（3）具体的場면을挙げて表記する

トラブル場面等、指導が必要な場面で保育者がどのように関わったかについての記述は、1年担任も必要としている情報である。記載できるスペースは少ないが、できるだけ具体的な場면을挙げ、その時々の子どもの状況と保育者の関わりについて記載できるとよい。ただし、気になる子がいる時だけ見るといった「対処療法的な活用」ではなく、要録は全員の子どもの理解するための手だてであることを共通理解したい。

（4）保護者の情報の記載について

保育要録・指導要録ともに、「保護者についての情報」はほとんど記載されていない（本調査では、次子の出産に関わることのみであった）。公簿であり公開性が求められる要録に、1年担任が求めている「保護者についての情報」を記載することは難しいが、今後の重要な課題である。一案として、特に保育所の場合、出欠の状況、延長保育や土曜保育の実態等を記載し、保護者の就業状況も把握できるとよい。

（5）要録を通して保幼小が保育・教育内容を相互理解する

これまで筆者が続けてきた、自らの保育実践を踏まえた幼小連携の研究の中で、「幼小が保育・教育方法を相互理解し、それぞれの教育方法を見直すこと」の重要性を明らかにしている。¹⁴⁾ 小学校が要録の活用によって入門期の教育方法を見直したり、保育所や幼稚園が要録の記録方法を改善することによって保育方法を見直したりする機会になればと願っている。今回の調査は、1年担任が要録を十分に活用していなかったという残念な結果に終わったが、保幼小の連携が求められる今、要録の活用によって保幼小の相互理解が深まることを期待している。

2. 今後の課題

本研究で保育所保育要録と幼稚園指導要録の記述の相違点が明らかになった。しかし、まだデータ数も少ない上、長年指導要録を作成してきた幼稚園に比べ、本年度初めて保育要録を作成した保育所では経験知も全く異なり、記述に不慣れな面があるのは当然である。今後、数年をかけデータ数を増やし検証を重ねたいと考えている。ま

た、テーマを焦点化し、研究を深める必要性も強く感じている。

要録の活用に関しては、保育所・幼稚園に対して「要録において伝えたい情報とは何か」、小学校に対して「1年担任にとって必要な就学前の情報とは何か」「要録により保育所・幼稚園の保育・教育への理解が深まったか」「小学校入門期の指導にどう生かしたか」等のアンケート調査を行う予定である。そして、1年生が小学校入門期の生活をスムーズにスタートするための有効な要録の在り方を明らかにしたい。

引用文献、参考文献

- 1) 文部科学省，厚生労働省『保育所や幼稚園等と小学校における連携事例集』2009，p. 8
- 2) ベネッセ教育研究開発センター「幼小連携の現状と課題」『これからの幼児教育を考える』2009，p. 8
- 3) 文部科学省，厚生労働省『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』2009
- 4) 文部科学省『学校教育法施行規則』第24条，2010
- 5) 厚生労働省『保育所保育指針の施行に際しての留意事項について』2009
- 6) 文部科学省『幼稚園幼児指導要録の改善について』2009
- 7) 高辻千恵「保育所と小学校の連携に関する今後の課題：保育所児童保育要録を中心に」『埼玉県立大学紀要』2008，pp.15-23
- 8) N P O日本標準教育研究所『今すぐできる幼・保・小連携ハンドブック』日本標準，2009
- 9) 幼少年教育研究所『保育所児童保育要録記入の実際と用語例』すずき出版，2009
- 10) 柴崎正行監修『保育所児童保育要録&幼稚園幼児指導要録』ひかりのくに，2009
- 11) 厚生労働省 前掲書5)
- 12) 文部科学省 前掲書6)
- 13) 長尾彰夫「カリキュラム構成法としてのスコープ・シーケンス論」『大阪教育大学紀要』P.81
- 14) 井口眞美「幼小接続期の保育・教育の在り方の研究」『生活教育』2010年8月号，生活ジャーナル，2010